
クルトゥース ~碧槍の帝~

高田 玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルトゥース～碧槍の帝～

【Zコード】

Z8321C

【作者名】

高田 玄武

【あらすじ】

自他共に認める、極々平凡な男子高校生。或る日、脈絡もなく起つた異常事態に混乱する主人公は、不可思議な少女と出会う

まずはどこから説明すべきか。

俺はとにかく普通をモットーに生きる、そりゃあもつどこにでも居る極々一般的な高校生だ。映画で言うならエンドティングロールで「市の皆さん」、なんてその他大勢に分類されるべき、いや寧ろそれを望んで毎日を送っていた。送っていたはずだった。

なのに・・・神様、俺が何かしましたか！？氣に入らないことをしたというなら謝ります！ちゃんと賽銭箱にも一円玉じゃなくて十円玉、いや、どうしてもって言つなら五百円玉を泣く泣く奮発します！ほんとーは嫌だけどつー！ですからーどうぞ機嫌を直して、この俺に元の平凡で平和な毎日を返しやがつてくださいー！

・・・いや、別にこの時の俺は、それを冗談のつもりでもなく、ましてや皮肉で願ったわけでもない。至つて大真面目だ。ただし、この時点ですでに、願うべき相手を間違つてしまつていたわけだが。

今日も朝から降り続いた雨は止む気配が無い。もつとも、六月の中だつていうのに梅雨をモノともせずにカンカン照りが続けば、老百姓さんは大変だし何しろ異常だ。そう考えると、この絵に描いたような梅雨の天気は、そんなに悪いモンじゃないような気がしてくる。世界が平和な証拠。うん、やっぱり普通が一番だ。

教室の外は昼間だつてのに薄暗く、雨がしとしと降り続く。そんな景色をぼうつと見ていくうちに、なんだか眠くなってきた。

(ああ 眠い。あれかな、春眠暁を覚え)

とまで思つて、今が初夏だつたことに気が付く。心中で自分自身にツツ「ミを入れたりしながらなんとか眠氣を抑えようとするが、それはまあ俺の微力な精神力が強大な睡眠欲という怨敵に打ち勝てるはずもなく。

(ま、いいかあ。)

などと諦めるのもストレートに、眠りに墜ちて行つた。

2

ガタン。

突然、脳の一部が揺さ振られたような感覚で目を覚ました。ほら、墜ちる夢つてあるだろ? あんな感じでガクンつて。教室の中だったことを思い出し、俺は何やら恥ずかしいやら申し訳ないやらで、おずおずと周りを見渡す。

よかつた、誰も気付いてないようだ。思ったより大きな音を出したわけではなかつたらしい。クラスメイト達は俺を気にする素振りも見せず、音も立てずに机に向かっている。

・・・あれ? 音も立てずに?

妙な違和感を感じて、教壇の教師を見た。いつもなら耳に入るだけで眠氣を誘う淡々とした教師の声。それが一切聞こえない。教師は黒板に向かつたまま、チョークで何かを書こうとしているが、そのチョークは黒板に当たる音さえも発でずに停止している。

おいおい。何かの冗談か?

3

俺は後ろに振り向き、友人である男子生徒を確認する。そいつは確かに机に向かっていた。だが、シャープペンシルでノートに何かを書く途中で固まつたまま、ピクリとも動かない。

「　　おい！杉山っ！？」

呼び掛けてみるが、反応は無し。ドッキリか何かと思い、よくよく教室中を見渡してみたが、杉山と同じく誰一人として動いている気配がない。　俺一人だけを除いて。

「・・・マジか・・・？」

普通じゃない。どう考へてもこの状況は異常だ。時間が止まつたようなこの空間で、とりあえず俺なりに色々な考へを張り巡らせるが、そもそもが極凡人の俺だ。大したことが浮かぶはずもない。時間が止まつているのならなんでも好き放題できるな・・・とか、なんで今がテスト中じゃなかつたんだろう、なんて俗な考へが思考を埋め尽くしかけた時、はつと我に返つてもう一度頭を過つたのが、いつまでこのままなんだろう、などとやはり普通の考へでしかなかつたところが自分で悲しい。

いや、悲しくなんかないぞ。普通であることが何より。俺はそれを誇りにこそ思えど、悲観する必要なんてない。

そう思つと落ち着いてきた。そうだ、普通な俺は俺なりに、この状況を整理してみよう。

まず世間一般にこういう場合、王道のパターンが決まつている。そう、『夢』だ。うん、極平凡な俺にはそういうパターンが実にしつくつくる。よくよく考えれば、こんな夢に決まつてゐる。思い出せば、授業中にうとうとしていた俺が、そのまま爆睡していると考えるほうが無難じやないか。ははは、何を焦つていたんだろう、俺は。

それならば簡単な話だ。ここで机に頭でもぶつければ一気に目が覚めて俺はいつもの教室の中ってわけさ。そうと決まれば・・・つて待てよ。更に王道を考えれば、頭を打った瞬間に、うとうとしていた俺は机に頭をぶつけて目を覚ます。となれば、大きな音を立ててしまつて、さつき危惧していた状況に追いやられる、つまりみんなに笑われるか、教師に注意されるか、どちらかの運命が待っているわけか。

・・・・・うん。なんて平々凡々な結末だろ？いや、もうここまでセオリー通りなら、それはすでに芸術の位置に達してしまってい。我ながらホレボレするほどの平凡さだ。

俺は一度深呼吸して、再度机に腰を掛ける。

俺は一度深呼吸して、再度机に腰を掛けた。そして深く息を吸い、吐き、額を思いつくり・・

打ちつけたつ！

3

空気はしんと静まり返っている。しどしどと降り続いていた雨はもう止んでいるのか、窓の外からは何の音もしない。机に突っ伏した状態で居た俺は、顔を上げるのを少し躊躇つた。クラスメイトに笑われるのは覚悟していたが、それでもやはり目立つのがイヤな俺としては若干の勇気を必要とする。

深く息を吸つて、覚悟を決める。おずおずと、ゆっくり頭を上げた。

誰かの声が聞こえた。それも吹き出すような、何かを堪えるような。

「 ふつ。」

ダメだ、いくら考えてもその言葉しか浮かんでこない。俺はさすがに自分自身の普通さにがっくりとうなだれてしまつ。と、その時 。

・・・・・。

・・・・・アリエナイ。

・・・・・。 マジか。こんな状況で、超の付くほど的一般ピープルな俺に
どーしろと言うのか。いや、それ以前にこんなことがあつていいの
か。百歩譲つて、まだ一般常識が通じるようなトラブルなら認める。
どこその時代遅れな柄のよろしくない連中に絡まれただとか、家が
火事になつただとか、そんなことが望むべくして起ころんてのは
もちろん御免だが、とにかくこの状況はそんな範囲を遥かに越えて
一気にやつてきたわけだ。考える。有り得てしまつたからには受け
入れないとならない。普通な俺は普通なりに、この状況をどうにか
しなければならない。

4

笑えない。笑われるのは覚悟していたが、はつきり言つてまつたく
笑えない。
そこは相変わらず、時間の止まつたままの、不可思議な教室だつた。

・・・・・。

・・・・・。 もい。

・・・・・。

・・・・・。

俺は突然のことに驚いて、身体を大きく跳ねさせながらも、声のしたほうを見た。

「 つふはははは！ あーはつははははつ！」

・・・ 声の主は、俺が振り向いたとたん、大声をあげて・・・ 文字通り、笑い転げていた。

「あははは・・・『め、『めん、あは、あははははは！』」

・・・ なんだ？ つか、笑われる覚悟ができてたつて言つたつてまさかここまで大爆笑されるとは思つてなかつた。いや、そんなことよりこいつは誰だ？ なんで俺を見て笑つてんだそんなところで。クラスの奴じやない。それどころか、恐らく高校生でもないんじやないか？ 小学生・・・せいやせい中学つてとこだらう。おかしな服を着た緑色の髪をした少女が、教室の入り口で腹を抱えて笑つている。余りに脈絡が無すぎて、俺はしばらく口を開いたまま言葉をなくしていた。

「あはははははははつ・・・『め、マジ』『めーー』、いやせ、あ、あ
んた・・・ふふつ・・・ふわーつはつはははは！」

「・・・。」

・・・ 少し冷静になつてきたら、なんかムカついてきた。なんで俺が見ず知らずのガキに指を差されて大爆笑されなければならないのか。

「・・・・・・・ おい。」

ふつと口をついて出た言葉は、不機嫌以外の何物でもなかつた。

「ふつ・・・・・くつ・・・・ちよ、ちよいまつてーお、お腹が・・・よ
よじれ・・・・・くくつ・・・・は、ひい・・・。」

一体何がそんなにツボに入つたんだか、少女は呼吸困難一歩手前くらいいの勢いで尚も笑いを止めようと必死であがいている。

• • • • • • •

一瞬ムカつとした俺ではあつたが、余りにも盛大に笑い続けやがる
ので、ムカつきを通り越して逆に呆れていた。

「ひ、ひい・・・ふ、ふあつ・・・。」

ようやく落ち着きを取り戻してきたのだろう。少女は深呼吸を始めると、呼吸を整えだした。

「・・・ふう・・・はあ・・・。」

卷之三

「……」ほん。・・・で、なんだつけ?「

「そりや、こいつの仕事だつ——」

「だつて——！さつきから見てたらあんた、なんかぶつぶつ笑いながら眩いてると思つたらいきなり机に頭ぶつけたりまたボソボソ言いだしたり、かと思つたらいきなり落ち込んじゃつたり・・・なんかすんごい面白かつたんだもんっ！」

・・・見てやがったのか。

「んな」と言つたつてこんな状況でまともな行動できる奴がいるか
つ！」

「だから説明しよーとしたんじゃんかー！そしたらあんたいきな・・・
・つぶ、お、思い出したらま、また笑いが・・・つ。」

「説明すんなうわと掛けやがれよつ・・・・・つて、え？お
前・・・。」

そこで気付く。相変わらず俺とそいつ以外のクラスの奴らは止まつ
たまだ。つまり、動いているのは俺とこのガキだけ・・・？

「だ、から、声掛けようとしたのつーそしたらあんたが勝手に自分
の世界に入っちゃつたんじやん！・・・あー苦しかったあ・・・。」

「ちよつと待て。つてことはお前、今の状況がどういう状況だか理
解してんのか？」

「え？あ、うん。だつてあたしがあんたを連れてきたんだもん。」

「・・・は？」

今、あつけらかんととんでもない」とを口にしなかつたか？

「だーかーらーー！あんたを！」の『垂直空間』^{ディレイ・ワイヤ}に連れてきたのはあたし
なんだつてばー！」

・・・うん、確かに言い切つたな。

「あー・・・ちょい待て。今頭ン中を整理する。」

つまりあれだ。この極凡人たる俺の精神状態を錯乱させた元凶はつまりこの少女だと。更に付け加えるとそんな俺を見ながら腹がよじれるくらい大爆笑しやがっていたのもこいつだ。

二つのことを繋ぎ合わせると、俺をからかうためにこんな手の込んだ超常現象を用意したつてことになる。・・・わざわざ？何のために？

自慢じゃないが俺には取り柄がない。そりゃもう可もなく不可もなく。当たり障りもなく、居ても居なくても分からなくくらいに平凡な人生を送ってきた俺だ。余りの存在感の薄さに、いつぞやの修学旅行では集合時間に遅れ、バスに乗れなくて置き去りにされたくらいだ。その時はなんとか途中で気付いてもらい、タクシーで追い付くことができたんだけど。

・・・まあとにかく、それくらいに超越した凡人な俺を陥れる理由とはなんなのだろうか？

「・・・で、何が目的だ？あいにく俺にはこんな妙などこに拉致されるようなことなんて身に覚えがないんだが。」

少女は何故だか一瞬目を丸くして、少し考えた後、にこやかに答えた。

「簡単に言つとね、あんたを殺しにきたの。」

「ほほー・・・。」

あー、なるほど。そういうことなら理解出来る。まあの状況にお

いて考えられる」といつてのは対して幅も無いんだが。

「・・・で、何の為に?」

極々冷静にそう返すと、少女は少しつまらなさそうな顔をした。

「あれ? 妙に冷静じゃん。なんで?」

「なんであつたって、それが今の状況から推測するに、最も『普通』だからだ。それとも何か? お前は俺をからかうためだけに、こんな手の込んだ超常現象を用意したってのか?」

少女はまたもや丸い眼を更に丸くすると、口を開いた。

「へへ、驚いた。最初はどんなバカかと思つたけど、单なる馬鹿じやないのね、あんた。」

「・・・せりや、じつも。」

あんまり馬鹿だ馬鹿だと言われるのは癪に触つたが、ここで喚いても仕方ない。どうやら、この異質な状況に於いて、この少女が鍵を握っていることに間違いはない。ここは合わせてやるべきだひつ。

「で? 質問の答えがまだだ。お前は俺を殺しに来たと言つたが、それは何故だ? 理由も無しに殺されたんじゃ俺も浮かばれんぞ。」

少女は少しだけ考えると、俺のことを見下ろして眺めだした。

「な、なんだ?」

「……うん、そうね……見てくれば平凡だけ……うん、まあいいや。決めた！」

・・・?なんだ?何を決めたって?

「あんた、あたしと契約しなさい。」

へ?

契約?なんだよそれ?

俺は少女の言つている意味が、全くもつて理解できず、惚ける。

「簡単なことよ。今から言つて葉を、あんたの口から復唱するだけ。ね?簡単でしょ?」

いや、簡単だと難しいとか

「……………」
かんねえつ……」

少女は、きょとんとして、何やらまた考えだす。
うきょとんとしたいのは俺のほうなんだつーの。

「あ、そつか。あんたは何の『記憶』も持つてなかつたんだ
つた。・・・そつかそつか、あははは・・・あー危ない、またアト
ウラに馬鹿にされるとこじだつたわ・・・。」

・・・何やうりよく分からんが、説明する気になつたようだ。

「えーと・・・じゃあ何から説明しようか？・・・うん、まずはあたしのこと。・・・そうね、あたしはあんたたちの言う 神様つてどこになるのかな？」

「神様あ！？・・・こいつが？・・・いや、別に俺が本物の神様を見たことがあるってわけじゃないが・・・にしたつてこいつを神様と呼ぶには、いくらなんでも・・・」

「けど、あたしたちを神様なんて呼ぶのはあんたたち人間だけ。あたしたちは、『裁定者』って呼んでる。あくまで、人間の言葉を借りて言うとだけどね。」

「『裁定者』・・・裁きを定める者？・・・一体、何の？」

「・・・大昔、それはそれは遙か昔に・・・永遠の命と、大いなる力を持つた生命体がいたの。それが、『旧きものども』。彼らは、永遠に等しい時間の中で、同じくらいに無に等しい自分達『旧きものども』を哀れんだ。どれだけ永い時間を生きられようが、どれだけ果てしない力を持つていようが、所詮、永遠なんて『無』に等しいことに気付いたのね。」

「・・・当然だ。有り余る力を持つていようが、永遠の命を持つていようが、役に立たなければ宝の持ち腐れ。しかも死ねない分だけ性質が悪い。」

「でもそれに気付いた時には遅かった。『旧きものども』は、すでに永い時を生き過ぎたの。そこにあつたのは、限りない『混沌』でしかなかつた。」

つまり力は暴発を重ね、死ねない故に増殖して、後戻り出来ないと

「今まで行つちまつたわけだ。

「そんな中、一柱だけ、なんとか理性を保つてゐる生命体がいた。それが『クカルトゥル』。この世界を造つた、創造主よ。彼は、自らが力に呑まれ、溺れてゆくことを忌み嫌つた。だから、自分の理性が消え去る前に、この世界 地球を創造し、自らの魂とその肉体を分けて、『生命』を産み出したの。」

「・・・とんでもないスケールの話だな。世界を造つた神様がいて、その神様自身が分かれたのが生命 つまりは俺たちだってのか？」

少女は「くつと頷き、更に続ける。

「『クカルトゥル』が産み出したのは、まず最初に魂の分身。『始まりの子』、ら二十八体。そして、その後に自らの肉体を七つに裂き、魂を導く為の役割を持たせたあたしたち『裁定者』を造り上げたのよ。」

スケールのでかすぎる話だが、ここまでなんとか理解出来た。キリスト教や他の宗教なんかでも似たような話があつたからだ。

「 ちょっと待て。そこまでは理解出来たが 肝心の、俺が殺される理由が全く解らん。あと・・・なんだ？その、魂を導くつてのははどうこいつことだ？」

すると少女はクスリと笑つて、続けた。

「 言つたでしょ？簡単に言つと、つて。この話には続きがあるの。 無から生命を産み出した『クカルトゥル』を、他の『

『旧きものども』は氣に入らなかつたの。自分達以外の生命体を認められなかつたんだと思う。すでに彼らは理性の欠片も無い、傲慢で貪欲な、醜い獸に成り下がつていたから。』

「・・・俺にはよく解らんが、あれか？悟りを開くつて意味が、要らない感情や感覚を捨てるつてことだとしたら、それの極論つてことか。つまり、永い年月を生きる為に、要らない感覚や感情を少しずつ削り取つて、残つたのが『己の保存』だけになつちまつたと。」

少女はまた目を丸く見開いた。

「・・・あんた、頭いいわね。・・・そう、その通りよ。・・・己への執着だけが残つてしまつた彼らにとって、この世界はまさに異分子だつた。だから滅ぼそうとしたのよ。遙か昔、『ルルイエ』といつ『旧き神』を使ってね。『旧きものども』は、兵器たる

『ルルイエ』をこの世界に落として、『クウルトゥル』の分身である全ての生命 あたしたちを含めて、全てを飲み込もうとした。・・・ま、なんとか食い止められたから今のこの世界があるんだけどね。それでも大きな犠牲を払つたわ。ほとんどの『始まりの子』の魂や・・・『裁定者』の半数が、『ルルイエ』を封じる為に犠牲になつた。」

「滅 つ！？ け、けどちょっと待て！『旧きものども』つてのはあれだろ？とんでもない力を持つてたんだろう？なのになんでそんなまじめつこしいやり方を？やるなら自分でやりやいいの。」

「・・・出来ない理由があつた。それは『旧き盟約』。彼らは、互いに干渉しあう」と恐れた。『己への執着』の為に、盟約が必要だつたの。」

・・・なるほど。そう言われば解る。同じように大きな力を持つ者同士が激突すれば、消滅、融合、反発・・・どちらにしろ、何が起ころるか解らない。互いの保存の為に用意したルールってわけだ。

「そして、現在。『旧きものども』が動きだしたのよ。再び、『大いなる災い』を引き連れてね。」

「…………なんだつて？つてことは・・・その、『ルルイエ』の時みたいに・・・世界が滅ぶかもしれないってことかつー？」

「そうさせない為に、あたしたち『裁定者』は、『始まりの子』を集めてるの。この世界で、彼らの陰謀を防ぐにはあたしたちと『始まりの子』の力を使うしかないから。」

・・・なんとなく、流れが読めてきた。つまり、こいつが探してるのが『始まりの子』で、俺の前に姿を現したってことは。

「俺が・・・その、『始まりの子』だと・・・？」

「その通りよ。手間が省けるわね。あんた、実は頭の回転恐ろしく早いでしょ？」

までまでまでっ！！

「ちょっと待て！？いや、俺はこの通り凡人中の凡人、キングオブ凡人だっ！俺にそんな凄い力があるわけないだろ！？」

「『始まりの子』の魂はね、オリジナルの魂なの。オリジナルの魂

は「コピー」と違つて、消滅することはない。それどころか、コピーの魂を使って集めた『記憶』や、オリジナルの魂が宿った肉体の『記憶』を全て保存して、貯蔵する。最も、肉体が死ねば次の肉体に自動的に移つて、表向きの記憶はリセットされるから、どの『魂』であつても普通は変わらないんだけどね。『クウルトゥル』がそう造つたから。・・・つまり、肉体の力はほとんど関係ない。肝心なのは『魂』の力。即ち、『保存』している『記憶』の力ね。人間が独自で造つた『魔術』なんかに関しても同じような理論を使つてるわ。最も、その場合は補助的な役割として『呪文』であつたり『紋様』であつたり、外的な『記憶』を引用してるけど。」

「つ、つまり・・・俺が何であれ、俺の魂にはそれだけの『力』が宿つてるとことか・・・？」

「そゆこと。・・・まあ・・・無理強いはしないわ。ほんとは首に繩付けてでも連れて行きたいとこだけど・・・アトウラに強く止められてるから。　でも。もしあんたが断つたら、どうなると思う?」

・・・『ルルイエ』の時は、『始まりの子』のほとんどと、『裁定者』の半分が犠牲になつたつて言つてたな?つてことは、今残つてるのは俺と・・・あとどれくらい残つてるかは知らないが、『ルルイエ』の時ほど戦力が居ないのは間違いない。それと『裁定者』が、この少女を含めて、三人か四人。・・・つまり状況的には圧倒的不利つてことか。俺が断れば、その状況は更に悪いほうへ傾く。・・・それは即ち、この世界の滅びを指すつてことだ。・・・くそつーどちらにしても俺にとつては悪い状況には違ひないってことかよ!」

「・・・お前、俺を殺しにきたつて言つたな?俺が断れば・・・どうするつもりだ?」

少女は二コリと微笑む。

「別にどうもしないわ。でもあなたが断れば、この世界は確実に滅ぶわね。・・・要するに、死ぬのは同じよ。みんなで一緒にね。」

・・・なるほど。逆に受け入れれば、俺は今までの生活を捨てなきやならない。それはある意味、今までの俺が死んだのと同意だ。・・・悪くすれば、本当に死ぬようなこともあるかもしね。その時点で、世界も滅ぶ。

つまり俺には
。

「くそっ！選択は始めから一つひとつでことかよッ！」

俺が下唇を噛むと、少女は満面の笑みで微笑んだ。

「やつぱあんた、頭の回転、早いわ～。安心して。あんたは誰にも殺させない。あたしと契約してくれるなら、あたしはあんたを護る。それがあたしの『力』だから。」

「...」
「...」
「...」

「簡単よ。あたしの名は『イアクグア』。さあ、あたしの名を呼んで。あなたの名は？」

『アイアクグア』の身体が、エメラルドの光を放つた瞬間、理解した。契約というのがどういうことか。俺は、少女に向かって『命令』する。

「俺の名は、『向井明』つー！我が名に於いて
クグア』よー力となれツツツ！ー！」
『イア

エメラルドの光は一度広がり、段々と収縮して一本の棒になる。棒
はゆっくりと姿を変え。

「 つー、これは ？」

『我こそが主人の刃。我こそが主人の楯。我は、『イアクグア』。
帝を守護する者なり。』

まばゆい光に包まれて、手に残ったのは、エメラルドに輝く、三つ
又の槍だった。

「 つー、・・・イアクグア・・・お前か・・・？」

『・・・ま、仕方ないよね。ほんとは不本意だけど、力を貸したげ
るわ。感謝しなさい？』

・・・よく言づ。始めつかりそのつもりだつたくせに。

『 ほらつー。さつそく来たわよつー。気合を入れてつー。』

へ？

「 ・・・來たつて、何が？」

は 『 ・・・あれ？言つてなかつたつけ？最初にあたしたちがすること
は 』

と、説明を受けるより先に、奴はやつてきた。ドゴンと地鳴りを上げて、校舎の外に見えたのは。

「 なつ なんだありやあつーーー? 」

そこに居たのは、見たこともない化け物だった。

『 断片の欠片』 よつ!—すぐ外に出て!—『 亜空間』 とは言つてもダメージは残るわ。早くしないと、この教室」と吹き飛ばされるわよつ!—?』

「 なつ つ!—? 」

なんだとおつ!—? ?

と、言うよりも早く俺は教室を飛び出していた。
マズい、非常にマズいっつ!—!—あんなのがここで暴れ回つたら

それこそ、笑い事じや済まされない。

俺は必死で走つて、校舎を後にする。走りながら

「 つと、とにかく説明しろつ!—簡潔につ!—可及的速やかにつ!—!—! 」

『 あー・・・つと、えとね? あたしたちが最初にしなきゃいけないのは、ある『 魔本』 の断片探し。その魔本つてのがまた厄介な代物で 。』

ズガー——ツンツツ!—!—!

ぐあつつ!—? くそつ、攻撃してきやがつたつ!—!—!
十メートルはあるんじやないかと見られる化け物が、これまたとて

つもなく長い腕を振り回す。なんとかグラウンドまで出てこれたの
で校舎に直接的な被害は無かつたが、力任せに振り回した腕は、地
面にごじでかい穴を開けた。

「 つー！ マジかよっ ！？」

化け物は地面に腕を突き立てて、態勢を建て直そうとしているのか、
ゆっくりと腕を引き戻してゆく。
だが動き自体は愚鈍だ。避けられないほどじゃない！

「 つちいっ！ イアクつ！ 説明の続きだッツ！！」

『 つーあいつはカルキ！ 』『 クルト・ウース断章』の三番田のペ
ージ！ 存在 자체は物凄く不安定だから、核を壊せば簡単に倒せるわ
！ 核は つ！』

その瞬間、目の眩むような光が辺りを包み込む

「 つくうつー？ メガトンパンチの次は破壊光線かよっ！ ？ハ
イダー（古）かあの野郎つ！」

カルキの口から発せられた非常識な光線をなんとか躱すと、俺は槍
を持つ手に力を込めた。

「 核はどこだつ！？」

『 額よつーあの水晶体を壊せば断片に戻るわつー！』

額 つてことは、ヤツの懷に飛び込めってことか？ いく
らノロマだからってそうやすやすとは潜らせてくれそうもないが・・

・ん？待てよ。・・・そうだ、その手があつたか！

「・・・額だな？わかつた。」

『どうするつもりっ！？離れればビームが、近寄ればあのとんでもないパンチが襲ってくるわよ！？どうやって』。

俺はイアクの言葉が終わるのを待たずに、カルキに向かつて一直線に走りだした！

「 ひっすんだよっ！！」

『ちよっ！あんた、なにするつもりよっ！？』

一直線に向かつてくる俺に対して、カルキは例の破壊光線を放とうと一瞬硬直する！俺はその瞬間、左に飛んで光線を反らした！

『つーまさか つー』

「 ガラ空きなんだよっ！！」

俺は槍 『イアクグア』を大きく振りかぶると

『 ちよっ、やめっ つー』

投げた。

「 飛んできええツツツツー！？！？」

『あやあああ／＼ツツツツー！？！？』

。

・・・・・。

俺の投げた『イアクグア』は、光線を放つた直後に動きを止めたカルキの脳天を、文字通り、貫いた。

額の水晶体ごと頭を貫かれたカルキは、断末魔の叫びをあげながら光の粒になって、下から消えてゆく。カルキの真下にいた俺は、上から落ちてきたイアクを受け止める。

「 つふう。なんとなるもんだ。」

俺はその場に座り込むと、とりあえず息を大きく吸い込んで、吐いた。足には結構キていたが、動けないほどじゃない。相手が単純馬鹿で助かった。こりやちょっと身体を鍛え直さないと保たないな。

『 なんとなるもんだ、じゃないわよっ！ なんて無茶すんなのあんたっ！？』

「 ・・・いや、あの状況じゃ、誰でも思いつくと思つぞ？ 幸い、あいつ動きはトロカつたし。」

何やらイアクは「立腹の」様子だ。

『そーゆー問題じやないっ！！大体、普通投げないわよっ！？もし水晶体を外れたらどうするつもりだったのよー！？』

あー・・・そこまでは考えてなかつた。確かに、もし急所を外れていたら手元に武器は無し、更にはあのメガトンパンチの反撃を食ら

つてオダブツだつただろつ。

「 ま、上手くいつたんだし、終わり良ければ総て善しつてことで。」

『 ！・・・ 信じらんない・・・ あんた、やつぱただの馬鹿よ
つ！バカバカバカ大バカつ！』

「 なにおうつ！？』

『バ――ーッカ！』

「 馬鹿馬鹿言いすぎだつ！大体、お前がちゃんと説明してり
やこんなことにならなかつたんだろうがつ！』

『 後先考えない大馬鹿者に言われたくないわつ！大体あんた
の何が普通なのよつ！？まともな神経の人間にできることじやない
もんつ！』

「 俺のどこが普通じやないつて！？しかも今まともじやない
とか抜かしやがつたなつ！？ 一番非常識なお前だけにや言わ
れたくねえつ！』

・・・・・。

売り言葉に買い言葉。結局、そのまま一小時ほど、この妙竹林な

口喧嘩が続いた。

・・・と、まあこんな感じで俺の平和で平凡なこれまでの人生は幕を下ろし、この非常識なガキとの生活が始まったのである。
・・・ちなみに、無事家に帰れたのが、グラウンドに空いた穴を埋めたり着替えをして教室に戻つて授業の続きを受けたりした後だつたことは、言つまでもない。

続

死について、抵抗があつたわけでもない。もつと言えば死という概念が数多の世界においてどれほどの影響力を持つどうが、私にはどうでも良いことだつたのだ。

死の概念　つまりは肉体の滅びであるとか、魂の存在であるとか。そんな些細なことが、本当につまらなく感じた。いや、感じていたというべきか。

死という存在が生と隣り合わせにあることは理解していた。良く言えば覚悟が決まっていた、悪く言えばそれはどこまでも愚鈍だつたと言つことだ。

とにかく、私にとって生を全うするという意味が、死を待つということ以外の何物でもなかつた。

1

いつものように校門を抜けた場所に彼はいた。

「・・・。」

「あ、唐木さん? いやあ、き、奇遇だねえ。今、帰り?」

その彼は、じじ2、3日私の周りをウロウロとしていた。特に何をするというわけでもなく、ウロウロとするだけ。話しあげても、私は基本的に無視を続けていたが。

彼はクラスでも目立つほうではない。取り立てて特筆すべき箇所の無い、極々一般的な男子生徒だ。

「よかつたら、一緒に帰つてもいいかな? いやっ! 後ろからつ

「いいだけでいいから。」

「……。」

私は返事をせず、そのまま下校路を歩きだす。別に危害を加えるわけでもないのだから、好きにすればいい。私には関係の無い話だ。彼は、私の後ろからスタスタと付いてくる。別段、迷惑なわけでもなければ、元より私にとつてみれば自分を含めた全ての事柄をどうでも良いと感じていたのだから。それよりもこの男子が私になどまたわりつくことが不思議で仕方なかつた。だが三日目。そろそろ飽きる頃だらう。

「 あのや、唐木さん。」

そう思った時、彼が突然に口を開いた。私は内心少しだけ驚き、足を止めた。彼は更に口を開く。

「え、えとさ……こんなこと言つて、おかしい奴つて思われるかもだけど……唐木さん、神様の存在つて信じる?」

……突然、私の足を止めさせたほどの不意打ちの発言は、そんな言葉だった。

「……。」

私は思わず呆氣ことられ、立ち戻りした。いきなり、何の話なんか。

「いやまあ うん、神様ってのは言ひ過ぎかな。えーと、どうかかってーとなんというか……うう……あの、氣をつけたくて欲し

いんだ！」

・・・やはりよく、わからない。今度は気をつけろ？・・・もしかして彼は私をバカにしている？

「・・・・・」

私は振り向き、彼を見た。申し訳なさそうにあたふたとしている様子を見ると、馬鹿にしたという感じは見られない。じつと見ていて、もう一度彼が言った。

「あのほんと、いきなり変なことを・・・いや、こんなの全然普通じゃないんだけど・・・俺の言つこと、信じて欲しい！信じられないとは思うんだけど、いや、俺だつて未だに信じられないつーか・・・と、とにかく今は言えないんだけど、信じて欲しいんだ！！」

そういう彼の目は、本気だ。

「・・・・わかった。」

気が付くと、私は口を開いていた。

「・・・・へ？」

「・・・・貴方の言つ」と、信じる。気を付ければいいのね？」

「・・・・あ、ああ！」

彼は驚いていた。いや、こんな言葉が出たことに、実は当の本人が

一番驚いていた。一体何に気をつければいいのかすら分からなかつたが、彼が本気なのは十分に解った。私は、もう一度振り返つて、歩き出した。彼は黙つてついてきた。結局その日は、彼は私の住むアパートの前までついてきたが、さすがに部屋までは来なかつた。

「じゃ、じゃあ俺はこれで！また明日！」

彼はそういうと、一目散に駆けて行つた。・・・声に氣付いて、アパートの入り口で私が振り返つた時には、もつその背中は遠くになつていた。

・・・お茶くらい、飲んでいけばいいのに。などと私は一人で呟き、エレベーターに乗つた。

2

部屋の鍵を開ける。

ガチャ、と音がして、私はノブを回した。

制服とブラウスを脱いで、洋服掛けに掛ける。そして下着のままベッドに横になつて目を閉じる。

・・・彼の言つていた言葉。氣をつけろと。・・・一体何に氣をつけろと言うのか。そもそも、神様を信じるかという質問。・・・私は答えていらない。

神様・・・居るのかと問われれば、居ないことも無いのかもしけない。人がその存在を神様と呼ぶのであれば、多分それは存在するのだろう。ただし、その存在は、多くの人が望むような都合のいいものじゃないことだけは分かる。そんなものは、居はない。それを否定することもない。かと言つて、肯定するにはその存在は余りにもあやふやだ。

つまり、私にとつてはどうでも良い話。・・・そのはずだった。

しかし、彼の口からその質問を投げ掛けられた時、私の心は一瞬だ

が、ざわついた。

「神様を信じるか。」

神様とは何のことだらう。そして氣をつけるとはどういふことなか。

3

突然の物音で、私は目を覚ました。すぐに上着を纏い、カーテンを開けて窓の外を見る。・・・窓の外？この部屋は三階だ。しかもベルンダは無い。なのに何故、私はこんな無駄なことをしているのだろう。

しかし、窓から見える裏路地を走ってゆく人影らしきものを発見した時、彼の言葉が脳裏を過った。

一氣をつけて欲しいんだ！」

彼が言っていたのはこのことなのか？あの影のことを、彼は知っていたのか？

次の瞬間、私はスガリトを鼻につけ、部屋を飛び出していった。

4

「はあつ・・・・・」

あの影が向かっていたのは公園の方角だった。街の中では広い部類に入る場所だ。物音がしてから、私が起き上がり、窓の外を見るまでの時間はほんの十数秒。そんな短時間で、アパートの三階から飛び降りて逃げられる人間などいない。

人間でなければ、なんのだろう。不意に、彼の「神様」という言葉が頭をちらついた。

・・・馬鹿馬鹿しい。人の部屋を窓から覗いたあげく、全速力で逃亡していくような神様など聞いたことがない。

「・・・はあ・・・はあ・・・っ・・・。」

気が付くと、私は大通りを抜けて公園の入り口まで走ってきていた。急いだせいで、呼吸が追い付かない。額から伝わる汗が、シャツを濡らして背中が気持ち悪い。

息を整えて、冷静さを取り戻すと、急に馬鹿らしくなってきた。一体、私は何をやつてるんだろう。普段の自分なら、こんな出来事など、箸にも架けなかつただろう。それがこんなに息を切らして、得体の知れない何者かを必死で追い掛けているなど　正直、想像もできなかつた。

私は、どうかしてしまったんだろうか。

公園の中央、噴水のある広場まで来たところで、噴水の脇に腰を掛けてしまらくぼんやりとしていた。よくよく考えれば、あれだけのスピードで走り回るモノだ。方向が分かつたからといって追いつけるはずがない。ここまで考えて、やつと私は自分が冷静でなかつたかを思い知つた。

帰ろう。多分、あれは何かの見間違いに違いない。寝呆けていたのだろう、帰つてシャワーでも浴びてすっきりすれば忘れるに決まつてゐる。そう考えて、立ち上がつた瞬間だつた。

5

『ギャウウウウツツツ！－！－！』

獸が吠えるような・・・いやそんな生易しい、声と呼べるモノではなかつた。生の大木を引き裂いたような、地鳴りがするほどの『音

。それが、私のすぐ近くで辺りにけたたましく響き渡った。さすがに私は驚き、音のほうを振り返った。

そこに在つたのは、そんなけたたましい『音』を遙かに凌ぐ、この世ならざる、『恐怖』だった。

『ぐるるるるるるう・・・』

体高は2メートルを超すだろうか。全身に皮膚らしきものではなく、筋肉のような紅い筋が露出しており、口らしき場所は大きく裂け、真っ赤な舌からは涎を垂らしている。眼は一つしかなく、瞳孔が開き切つたような突き抜ける血走った眼球が、飛び出るかと思つほどにこちらを射抜いている。

蛇に睨まれた蛙とはこのことだらうか。明らかに補食者である『ソレ』を目の当たりにして、私は一步も動けずにいた。

ありえない、こんな生物・・・いや、存在自体が在り得ない。硬直したまま動けない私を嘲笑つかのように、その異様な化け物はズルツ、ズルツと音を発してこちらに向かつてくる。足なんかなんのかよく解らなかつたが、ヌルヌルしたような無数の蠢く触手で動く様は、一種、巨大な蛞のようにも見えた。

ゆつくりと迫つてくる化け物。私は、もうダメだと思つた。もともと覚悟はできていたはずだ。人はいつか死ぬ。死と直面して尚、それは揺るがなかつた。しかし、化け物の触手が目の前に迫つた時、思い出した。

『気をつけて欲しいんだ！』

彼の言葉が何を差していたのか。これでようやく解つた。それを理解した時、初めて私は後悔した。

もしもあの時、彼の言葉をちゃんと理解できていればこんな死に方はしなくて済んだのに。その刹那、私には初めて、ある感情が湧いた。

生きたい。

しかしだけでに遅い。こんな状態で、やつと私は理解したのだ。生と隣り合わせにあつた、死という存在を。私は、恐怖した。自らの肉体が、こんな異様な化け物に噛み砕かれて、引きちぎられ、消滅させられることを。そして絶望した。自分の今までの人生を振り返り、自らの愚かさに。そして・・・それは、本当に突然起つた。

6

『ピギイイイイツツツツ！――』

私が懺悔の言葉を浮べた瞬間。

化け物の悲痛な叫びにも似た『音』が響き渡る。
目を開けた私の視界に飛び込んできたのは　月の光を浴びて、
エメラルドに輝く、何か。化け物に深々と突き刺さる、それは・・・
三つ又の、槍だった。

『ピギイツツ！――』

頭部に躊躇無い一撃を受けた化け物は、さすがに堪らなかつたのか、先程までのゆっくりした動きとは打つて代わり、目で追うのがやつとなほどの機敏な動きで跳躍した。辺りには、どす黒い、恐らくはあの化け物の体液である液体が飛散している。

私はと言えば、何が起つたのかすら解らず、むづきまでの絶望感と、緊張の糸が弛んだ脱力感とで、その場にしゃがみこんでしまつていた。

「だいじょうぶか！？唐木さん！」

・・・事態が、全く把握できないまま惚けていた私は、そのエメラルド色に透き通る三つ又の槍をかざした人物が一体誰なのかを確認することにやえ、かなりの時間を要したようと思つ。それは、私の知つている人物　　彼だつた。

7

彼は、私に手を差し伸べていた。私は、その時ほど誰かに救いを求めるということに、安心感や安堵感を持つたことはなかつただろう。彼の掌は、とても優しくて、そしてどこまでも心強かつた。

「怪我は無い！？・・・つたぐ、よかつたよ、いつも通り張り込んでて！まさかこんなに早く接触するとは思つてなかつたけど・・・。

「

彼の手を掴みながら、私は鼓動を抑えようとしていた。色々な感情が堰を切つたように湧いてきて、私は・・・。

「・・・こじたつて、イアク！－あんのが出てくんなら先にそう言えよ！－」

『えー！あたしはちゃんと言つたよ！－あなたの理解能力が鈍臭いんじゃないのお？』

「なつ……」のガキ、俺のせいだつてんのかつ！？

『あ一やだやだ、これだから万年影薄男はやーねー。そんなんだからいつまでも主役になれないのよ。』

「なんだとつ！？今平凡を馬鹿にしやがつたなつ！？普通の何が悪い！大体な、おまえさえいなけりや俺だつてまともな日常を平和に、かつ有意義に送つてたんだよつ！それを」

『あんな箸にも掛からないような毎日の何が有意義なのよっ！ハンツ、ちゃんと笑わせてくれるわねっ！』

「おまつ！？・・・いー一度胸だ、」の際だからしつかりと身の程を教えてやる！－ついでに真の平凡とは何かを

・・・泣いていたような気がしたのだが、彼が何やら誰かと言い問
答をし始めたため、私は結局、彼の様子に茫然とするだけだったの
である。

8

しばらく、事態が飲み込めなかつた。それは別に彼のせこというわけではない。

「平凡男をナメんなあああツツツ！..！」

・
・
・
撤回する。

完全においてけぼりを食らつてゐるのはどうやら私だけのようだ。彼は私のことを忘れて、手に持つた、喋る槍と漫才のようなやりとりをずっと繰り返している。・・・何故か少し、ムカつとした。

「・・・あの・・・『向井明』くん?」

私はこの時初めて、彼を名前で呼んだ。

「はがが・・・おじいちゃんやめつ・・・ん?」

・・・やつと思いついたよつだ。彼は私を見ると、バツの悪そうな顔をして、引っ張り上げてくれる。

「うしょつと。あはは・・・ごめん、怪我はない?」

「・・・大丈夫。それより・・・むつきのは、何?」

私が質問を投げ掛けると、彼 向井くんは、頭をぽりぽりと搔きながら、何やら困ったような顔をした。

「あつはは・・・うーん、何から説明したもんかなあ・・・。」

彼は、槍をかざすと、何やら呪文めいた言葉を発する。すると、槍は瞬く間にその姿を変える。

「・・・・・」

「えつと、こいつの名前はイアクグア。あー、こんなナリでも一応、神様らしい。ほらイアク! 挨拶しろ!」

槍は、そのエメラルド色そのままの髪を持つた少女に変身した。・・・
・ 变身?

私はわけが解らず、ただ一言、ぽつんと呟くしかなかつた。

「・・・幼女誘拐?」

「 つー？」

彼はガーンと、それはもう漫画のような顔をして惚ける。その様子を見て、イアクと呼ばれた少女はキラーンと鋭い笑みを一瞬放つと、突然泣き（真似）ながら私に抱きついてくる。

「そーなんですー！」のお兄ちゃん、あたしに なことや
ことを強要するばかりかあげくには なんでもう

」。

「 んなあつー？！」

してやつたとばかりに私の胸の中でニヤリとほくそ笑むイアク。どうでもいいけど、私にも見えてる、それ。

「・・・そう。大変・・・だつたね。じゃあ警察、行こつか。」

「ぬあつー？待て、唐木さん！—騙されるなーー！」

・・・さすがにこんなお約束のネタに騙されるほど、私も世間知らずではない。だが、一人のやりとりが面白いのと、先程のお返しとばかりに、しばらく向井くんをからかつて遊んでいた。

その後、私は向井くんとイアクを連れてアパートに戻った。冷蔵庫に残っていたプリンをイアクにあげると、彼女は一生ついていきますと私に服従を誓つた。・・・うん、それもいいかもしけな

い。

そして、私は一人に詳しい話を聞いた。私が狙われていること。二人は、あるものを探しているということ。それは本の断片で、その本はとても大切なものであるということ。あと、イアクは私たちの言ひ、神様のようなものだということ。でもそれは都合のよいものではなく、人間という種よりも少しだけ特異な能力を持つているだけなのだということ。・・・一番驚いたのは、彼女はこの世界が生まれた時から生きているということだったけど

そして、私が狙われる理由は、私が向井くんと同じように、イアクのような・・・『裁定者』と波長が合う人間だということ。それをイアクは『始まりの子』だとか言っていたけど・・・詳しい部分は割愛する。

とにかく、私が気をつけなければいけない理由は以上の通りだったわけだ。あの時に詳しいことが説明できなかつたのは、実は確証が無かつたから。イアクに分かるのは、なんとなくのイメージだけ。それを確認するには、色々な方法があつたけれど、向井くんは毎晩、私のアパートの近くで張り込みをしていたらしい。それは、出来れば普通の毎日を送れるようにとの向井くんの優しさだつたわけだ。例の化け物は、断片の一部らしい。本の断片とはいえ、本 자체は魔術的にとてつもない力を秘めているらしく、断片ひとつであんな化け物なんて比べものにもならないほどの大魔物を具現化する。断片はそれ自体が意志を持ち、本の支配下から独立しているため、本に戻されることを拒否するわけだ。

断片を本に戻すことが出来るのは『始まりの子』だけ。故に、私が狙われたということらしい。

・・・なるほど、それなら納得できる。向井くんのよつた『裁定者』との契約も持たず、何の力も持たない私は、彼らにとつて恰好の標的だつただろう。

「……と、いうことで俺は唐木さんに接触したわけなんだ。……
その、何も言わずにごめん。」

「一人の証言からすると、遅かれ早かれ私は襲われていたはずだ。寧ろ、彼らのおかげで私は助かつた。感謝こそすれ、謝られることなどない。」

「……謝るのは私のほう。……ごめん。それと、ありがとうございます。」

「えっ、いや、唐木さんが謝る必要なんてないだろ？ 危険を知っていたのにちゃんと伝えることが出来なかつた……俺の責任だよ。」

「……向井くんは私に気をつけろって言つた。私は信じるつて言つた。なのに、不用意に自分から危険に飛び込んだ。自業自得。私は寧ろ向井くんに感謝してる。助けてくれて、ありがと。」

他人とのコミュニケーションには慣れていない。だから、今の気持ちをそのまま語つことしか出来ないけれど……それでなんとか向井くんには伝わつたみたいだ。

「……ま、そういうことなら。でもどうしよう？ 結局、根本的な解決にはなつてないんだよな……。多分、あんなのがまた襲つてくると思うんだ。四六時中俺が唐木さんに付きつきりつてわけにもいかないし……。」

「そうか、結局今も私には何の力も無い。もしも私が一人の時にまたあんなのが襲つてきたら……。考えたくもない。」

「はいはい！ それならいい考え方があるよー！」

突然の提案を発表したのは、イアクだつた。

「・・・なんだ? ピー セロクでもなこいだとは思ひが・・・一心
眞ひにみる。」

「いぢいぢ言い方がムカつくわねあんた・・・まあいいや。・・・明がここに住んじゃえればいいのよ！そうすれば万事解決つ！」

次の瞬間、彼の拳骨がイアクの後頭部を直撃していた。

「馬鹿かおまいはつ！！んなわけに行くかつ！大体、唐木さんは女子だぞっ！」

・・・なるほど。幸い、私は一人暮らし。向井くんさえ大丈夫ならそれで問題は無い。部屋も二つほど余ってるし。

「だつてそれが一番手つ取り早いじやないのよつ！どーせあんたん家は一人暮らしみたいなもんなんだし。塔子ん家だつて似たようなもんでしょ？」

「そういう問題じゃねえつ！！だ、大体がだな、唐木さんがそんなの良いわけねえだろがつ！！」

卷之二

「ほれみろつ！！大体お前は一般常識的に・・・つて・・・え？」

「向井くん達は断片を集めてる。そして断片は私を狙ってる。相互

関係の一一致。多分それが一番良い方法。」

「ほり見なさいよーー塔子だつて言つてゐるじやんーじやあ決定ね?」

「いや、ちよ、ちょいまつ! なんとこかそれは色々とす、いへマズイんじゃないかと思つたんですけど・・・。」

「・・・向井くんは、イヤ?」

「えあ、い、いや、イヤってわけじゃないんだけど、その、あの、えーと・・・。」

「何ぐたぐだしてんのよこの優柔不斷男つー塔子が良いつて言つてんだからいいじゃないつーー それより、このプリンつてもうないの?」

「・・・お前、最初つからそれだけが田端でだな・・・?」

「(えへへ) な、何のことかしら~~」

・・・何はどうあれ、こんな感じで三人(?)の同居が始まったわけである。

続

～夏休みのある日～

俺は向井明。とにかく平凡・平和・順風満帆をこよなく愛する17歳。取り立てて目立つところもなく、成績も中の中。クラスに一人は居る「極々普通」な、一介の男子高校生。・・・のはずだった。それが何故こんなことになつてしているのか。ほんの数か月前まで、教室の目立たない窓際の席で、梅雨の雨をぼんやり数えたり、そりやあもう平和に過ごしていたのである。

1

「あ～～せ～～らあああ～～～」

・・・この真夏の暑暑い口差しを更に暑苦しくするようなガキンちよは、イアクグア。このお子様にしか見えない外見で、なんと俺たちよじ遙かに長く生きていふと言つのだから驚きだ。

「ちよつと～～っ！～あんた、あたしのアイス食べたでしょっ！～？ も～信じらんないっ！～！」

外見と同様、中身までお子さま丸出ししきたもんだ。これでよくもまあ神様だなんて名乗れたな。

「ちよつと明つ！～？ 聞いてんのつ！～？」

「うつせーなあ・・・・お前じゃあるまこし、んなもん食うかつての。」

「じゃああたしのアイスはどこ行つたつてのよ！～？ 後で食べよつと

思つて冷凍庫にちゃんと入れといたのにいい～～～

ぐえつー首を絞めて振るなつーーー

「くおのつー出せつーあたしのアイスつーーー」

「うがつーだつーがつーりつーじらねえつでーーー」

「あんた以外にそんなこと誰がするつーのよ～～～つーーー」

「あなたこと知るかと言おうとした時、咳くような声。

「・・・じめん。私、食べた。」

イアクの動きが止まつた。ソファーの上で静かに読書をしていた唐木さん 唐木塔子 は、衝撃の事実をイアクに突き付けたのであつた。

「　　トーロ～～～・・・。」

イアクは恨めしそうな顔をしたかと思つたが、ぐつと堪えた。お、少しは成長したか？

「・・・おにしかつた？」

溢れださんばかりの涙で目を潤ませ、聞いた。

「・・・うん、絶妙。」

しかしその攻撃は自分にとつてトドメの一撃として跳ね返つてくる

。 ことを覚えたほうがいいんだ。 イアクは、無言で身体を震わせ、溜めた涙を放出している。 ・・・ 無残だ。 いや、学園じゅよお前も ・・・

• • • • •

う、ちょい待て、こちか!? イアクは無言で涙垂れ流し状態のまま、今度は俺のほうに何かを訴えかけている。

• • • • • • ○

「俺を見るな俺をつ！」

二〇一〇年九月

— 1 —

よっぽど口惜しいのだろう。Uの攻撃は止む気配がない。・・・・つたく・・・唐木さんがフォロー入れるとも思えないし・・・。

「へへへつああもつひーわかつたよ買えばいこんだら買えばーー」

ほんとう！？じゃあね、ついでにプリンと···。」「

嘔泣きかよ。いや、まあそりや判つてたが。

「なんで壇えてんだ。」

とつあえずスリッパで殴つといった。

2

「明～！早く早く～！」

結局、イアクの策略にまんまと乗せられた俺は、唐木さんが略奪したアイスを買わされる羽目になつた。イアクは玄関の前で相変わらず喚いている。

「 唐木さんは？行かない？」

「・・・ん。留守番してる。」

「あ、そう・・・。」

こちらもまた相変わらずソファーに座つて、何やら読書をしている。
・・・何々？・・・『戦乱時における休暇の過ごし方』？・・・なんのこっちゃ。

「・・・あの、唐木さん？それ、面白い？」

「・・・凄く。」

「あ、そう・・・。」

その本はよほど面白いらしい、唐木さんはこちらに田もくれずひたすらに読み耽つている。・・・しかし、戦乱時に休暇つて・・・取つての場合か？大体何の戦乱なんだ。

「あきらめつー? まーだつ! ?」

唐木さんは、そのまま軽く手を挙げて、俺を見送った。・・・そん

いかん、お子様が駄々を口ネ始めた。

「つと、とりあえず行つてぐるつー何かあつたら携帯こー!」

「・・・ん。」

唐木さんは、そのまま軽く手を挙げて、俺を見送った。・・・そん
なに面白いんだその本・・・。

3

「あつつ　　」

外は、真夏の炎天下。太陽の日差しが容赦なく、じりじりと皮膚を
焼き付ける。蝉の声が暑さを更に引き立てているようだ。

「明、早くー! 急がないとお店が逃げてくつー!」

逃げるか。

と、突つ込む気力すらこのむせ返る熱気に奪われる。マンションを
出た瞬間に部屋に戻りたい衝動に駆られていた。

・・・このマンションは、もともと唐木さんが一人暮らしをしてい
たマンションだ。そこに何故、俺とイアクが転がり込むことになっ
たかと言つと　　話せば長くなる。詳しい話は割愛するが、ある
事件をきっかけに、俺は唐木さんの護衛することになったのであ
る。まあ、俺もどうせ一人暮らしのようなものだつたし、家を空け

ていようが親が帰つてくることは滅多に無いし。

うちの親はそりやもうとんでもないくらいの放任主義で、エジプトで新しい文明遺跡が発掘されたの、やれ南極で凍り付けのナウマン象が発見されたのと世界中を飛び回つて。・・・そんな極楽とんぼを両親に持つたが故に、物心ついた頃には、絶対にあんな人間になるものかと、童心ながらに誓つたものだが。俺が平凡をこよなく愛する理由の確実な一つがそれである。

・・・そういえば、誕生日会を開くと言つておきながらその当田、多数の友人を招待しておいて、南米でインカ帝国の遺跡が見つかつたとか言ってそのまま飛んでったこともあつたな・・・あの時の惨めさと、友人たちの乾いた慰めと無理矢理な作り笑顔が、今も強く心に染み付いている。

・・・まあそんな理由と、イアクの強引な発案で、唐木さんの家に転がり込むことになったのだ。

もちろん俺は反対した。いくら護衛の為とはいえ、女の子のマンションに転がり込むなど・・・言語道断だ。

それは唐木さんも普通そう思つだらうと思つていたのだが・・・あるいは「う」とか、これがまたやけにあつさりと承諾してしまつた。そりやまあ、俺とイアクは断片を探していく、その断片の一部が唐木さんを狙つているとなれば、利害は一致している、しているんだけど・・・それとも何か。俺が常識だと思い込んでいたそれは実は間違いで、寧ろイアクや唐木さんの感覚のほうが常識だというのか。

いや、断じてそれはない！自慢じゃないが、俺は筋金入りの小市民だ。イアクの魔の手が忍び寄るまでは、俺はこの世知辛い世の中で、常に極一般人であると心がけた。そうして身に付けた必要以上の一般常識が、あんな物理法則を完全に無視した非常識な生物や、あの何を考えているのかすら解らない黙殺娘に劣るなど、有り得ない、いや有つてはならないのだ！！

・・・話は大幅にズレたが、まあそんなこんなで、この非常識な共同生活が始まり、今に至るというわけなのである。

「明～つー！ほら、コンビニコンビニー！」

そういう感じでこなつて、マンションから一番近い場所にあるコンビニ、「パーソン」に着いた。しかし、あれだな。たかだか歩いて10分程度とはいえ、この灼熱地獄の中だと想像以上に体力が削られる。

「早く早くーアイスアイスー！！」

・・・ここつ、マジで単なる子供だったりするんじゃないだろうな？それにあの体力・・・やっぱり、神様というのは暑さを感じなかつたりするんだろうか？・・・などと一瞬考えたが、そういえば子供はどんどん暑くても元気に遊び回ってるのを思い出し、やはりイアクがお子様なんだという結論に至った。

店に入ると、そこは正に砂漠のオアシスだった。エアコンのよく効いた店内は、外の灼熱地獄に比べると天国。寧ろ寒いと感じるくらいだ。

イアクはと言えば、店内に入るなり、速攻でアイスが陳列してある業務用冷凍庫にしがみつくようにして物色し始めた。・・・この様子だと放つておいても当分は離れそうにないな。俺はイアクを放置して、雑誌のコーナーへと赴いた。

最近のコンビニには何でも揃っている。日用品から食料品、文房具から雑貨に至るまで、生活に必要な物資は大方手に入る。まあ、量販店に比べれば若干値は高いが、飲み物や嗜好品、こういった書籍や雑誌程度ならほとんどの問題ない。俺も書籍店なんかには滅多に足を運ばないし、普段読むような本も漫画雑誌くらいのもんだ。

適当に雑誌のよく読む漫画やコーナーだけを立ち読みして、時間をもて遊びかけた時、ふと目につけた本があった。

「欧洲心理学」アス 口球団偏～」。

・・・なんだこれ？歐州心理学つてのもよく解らないが、サブタイトルに伏せ字が入つてるのはどういうことだ？それに心理学とアトロ球団に何の関係があるというのか。・・・この、妙にシユールな書籍のタイトルに、俺の心は奪われた、いやそれはもう釘付けだつた。・・・内容を確かめるには至らなかつたが。これはもしかしたら、唐木さんが喜ぶかもしれない。そう思い、俺は書籍をカゴの中に入れた。

「あきらへー！…これこれー！」

びつやう、イアクのほうも決まつたらしい。何やら嬉しげにアイスの袋を幾つか下げてきた。

「・・・なんだこれ。」

そこには得体のしれない名前のついたアイスらしきものが。

「へへへ、こいつちが『秋刀魚アイス』、んでこいつちが『サバ味噌煮かき氷』、そんでこれが・・・じゃじゃ〜ん！『ドクダミ茶シャーベット』！…・・・うわ～、これつて全部限定発売だからどこの店でも売り切れだつたんだよね～まさかこんなところで見つかるなんて・・・コンビニ、侮りがたしつ！」

・・・マジか？いやそれ以前にお前の味覚つづーかセンスはどうなつてんだつてツツコミはさておいて、何よりそれどこが発売してんだ？限定発売つてのもチャレンジヤーだが限定しないとマジで潰れるぞその会社、とか脳内を膨大なツツコミデータが回り回つたあげく、俺の一言は全く違つた質問になつていた。

「・・・あー、ところで、唐木さんに食われたのはどれだつたんだ

？」

「え？ 」この『サバ味噌煮かき氷』だけど？」

・・・唐木塔子、悔りがたしつ！

結局、その三つのアイスと俺が選んだ本、それとイアクの執拗な駄々コネ攻撃にあり、仕方なく牛乳プリンを三つ買い、家路についた。どうでもいいがプリンだけじゃないか、まともな買い物。

4

「たつだいま／＼！！」

イアクの上機嫌な挨拶で、俺たちはマンションに帰ってきた。しかし、帰りは更に暑かつた。冷房で冷えた身体には一瞬だけ外の炎天下は心地よかつたが、それも一瞬だけ。数分しないうちに汗が吹き出し、体力がどんどん削られていった。

「ふい／＼・・・あつちい・・・。」

俺は買い物袋をリビングの机の上に置くと、エアコンの冷気で冷たくなったフローリングの上にへたりこんだ。・・・うん、気持ちいい。

「・・・おかえり。」

ズレたタイミングで唐木さんの挨拶。・・・って、まだその本読んでたのか。あ、そういうえば・・・。

「トーハー…」これ見て見て…限定発売のアイスつ…みつけたんだよ～。」

・・・やっぱそれ、食つのか。

「あたし『秋刀魚アイス』ねーで、トーハせれつー『ドクダミ茶シャーベット』つーそれから」ひちは…。」

「俺は要らん。食つなら一人で食え。」

「え～～！？でもこれ限定発売なんだよ？今じゃなきや食べられないとだよ？」

・・・できれば未来永劫口に入れたくない。

「トーハもおいしそうに言つてたし…ね～？」

「・・・うん、絶妙。」

その絶妙つて「メントが余計恐いんだよ！」

「とにかく俺は食わん。俺のことは気にせず一人でやつてくれ。」

「も～、せっかく買つてきたのに～…いいもん、一人で食べるから～あとでほしいって言つたつてあげないんだからね～だ！」

そういうながらアイスの袋を開ける一人。…ビールでもいいが、買つてきたのに～、ってそれは俺の金だつてこと気にはしてないんだろうな…。まあ別にいいんだけど。

卷之三

「ひやー、冷たい

・・・マジですか？・・・やっぱりイアクの味覚はゴッドクラス（神級）だったか・・・（ある意味）。

「・・・・・むぐむぐ・・・・・」

あ、唐木さんも口に入れた。

- 1 -

うわっ・・・すげー幸せそーな顔してる・・・。初めて見るぞ唐木さんのこんな顔・・・。

「おーしーねー！」「ー」

……（エエ）超絶妙。

・・・やはり、Jの一人の味覚は同レベルか・・・。こりゃ気をつけないと、そのうちとんでもないもんを食わされそうだな・・・。二人はそのあと、アイスを三本ともペロリと平らげた。イアクは満足したのかソファーに丸まつてすやすやと寝息を立て始め、唐木さんは読書の続きを再開し、俺もぼけーっとまどろんでいた。・・・うん、平和だ。こんな時間がずっと続ければなーなんて考えながらふと思いついた。

「あ、そうだ。」

俺はわざわざの「ノンビリ袋から、ガサガサと例の本を取り出し、唐木さんに差し出す。

「これ、唐木さん!」。

俺の手に持った本を田にしたとたん、唐木さんの田の色が変わった。

「…………」

読んでいた本をパタンと閉じ、差し出した本をじーっと見つめる唐木さん。・・・その表情には、先程以上に「喜」が滲み出している。・・知らなかつた、唐木さんつて、結構分かりやすいんだ。

「…………これ、もうつて・・・いいの・・・?」

なんていふんだろう。「おあづけ」をくらつた飼い犬が、よだれを垂らしながら主人の「よし」を待つてゐるよつな・・・いや、実際には涎は垂らしてないんだけど、そんなオーラがフツフツと感じられる。

「あ・・・い、いや、コンビニ立ち読みしてたら、面田やうなのを見つけたから・・・もしかしたら、唐木さんが喜ぶかな~って。」

俺が本を手渡すと、何やら宝石でも扱うようにキラキラした田で表紙を見つめ出した。

「・・・あの、唐木さん? その・・・もしかして、その本、凄く欲しかつた・・・とか?」

「…………(ノクノクノクノク)。」

俺が訊ねると、唐木さんは首が折れんばかりにうなづいて見せる。

・・もしかして、イアクと唐木さんって、物凄く似てるんじゃないかなうか。

唐木さんは一通り本の表紙を満喫したあと、俺のほうを向いて、目を輝かせたまま、一言。

「・・・死んでもいい。」

「あ・・・あはは・・・喜んで貰えて、良かつたよ・・・。」

いささか、今の状況において「死んでもいい」はあんまり洒落にはならんかったが、まあなんていうか、たかが985円（税込）でここまで喜んで貰えるなら、安いもんだほんとに・・・。

その後、唐木さんは何度も何度も本の表紙を嬉しそうに眺めた後、結局大事そうに胸に抱えたまま、先に読んでいた本の続きを読み出した。

結構可愛いところあるなー・・・なんて思いながら、フローリングに座り込んで俺も自分の漫画本を読んでいると、段々眠気が襲ってきた。

こんなところで寝ると風邪ひくなー・・・とか考えながら、眠気を払おうとしたが、そこはそれ、俺の微力な精神力では、睡魔という強大な魔王には、やっぱり勝てるはずもなく。

・・・そのまま俺は、安眠の底に落ちていった。

・・・・・。

・・・う・・・。

・・・うへん、なんか、重い・・・。

何故か俺は息苦しさで目を覚ました。

・・・そうか、リビングで漫画読んでそのまま・・・。今、何時だ?

起き上がろうとして、異常に気付いた。

「・・・すー・・・・。」

「・・・くう・・・・くう・・・・。」

・・・はい?

俺の胸の辺りに、何か乗ってる?それも一つ。

「・・・すー・・・・すー・・・・。」

「・・・くう・・・・ん・・・・むこち・・・・。」

・・・・・・・・・・。

・・・俺は、寝抜けた頭を出来る限りフル動員し、考える。

・・・乗っているものは、一つ。それも、寝息をたてるような生き物。俺の近くで寝息をたてて寝るような生き物といえば・・・?

・・・・・・・・。

・・・やつぱ、二人しかいねーよなー・・・。

イアクはともかくとして、多分俺が寝てる間に唐木さんもうたた寝を始めたんだろう。でもエアコンがつけっぱなし。それで、寝抜け

たまま暖かい場所を探して・・・。

・・・ってこの二人は動物か？でも考えてみたらイアクは猫で唐木さんは犬っぽいよな・・・ってそうじゃない！この状況は色々とヤバい！いや、もう、色々と！なんとか抜け出さないと！！俺は一人を起こさないよう抜け出そうとして、ゆっくりと動いてみたが、左右から一人に枕代わりにされているため身動きが取れない。そういうしてのうちに、暖かさも加わってまた眠気が襲ってきた。・・・このまま寝たらえらいことになるぞおー・・・と一応抵抗してみたが。

それもまた、俺の薄弱な精神力でどうにかできるわけもなく。

ま、いいかあ。

などと、結局夜になつて腹を空かせたイアクに叩き起こされるまで、平和で幸せな眠りを続けたのであつた。

続

それが、彼女にとってみれば運が良かつたのか悪かつたのかは解らないが。

だが、有り得てしまった。ギリギリのラインで日常を保つていた彼女の人生は結局、その存在によつて幕を下ろした。いや、本当はすでに、次の幕はとっくに上がつていたのかも知れないが。

1

俺たちは相変わらず毎日を送っていた。夏休みに入り、あれ以来何事もなかつたかのように出現しない断片の欠片に若干の肩透かしを食らいながらも、なんとなく長期休暇を平和に過ごしていた。時折、イアクのヤツがなにやら妙な食品なのかジョークアイテムなんか分からぬような代物をどこからか手に入れてきては俺に食わせようとしていた（本人は美味しいと思っているのだから、悪気は無いんだろう）、唐木さんは相変わらず飽きもせずシユールなタイトルの書籍を読み漁りつつイアクをからかって遊んでみたり（いや、もしかしたらこれも悪気はないのかもしれないが）、あんなんというか、すでに当たり前と化した日常をのんびりと過ごしていたわけである。そんな、もう夏休みも中盤に差し掛かったある日。

・・・ もひ、毎度お馴染みとなつてしまつたお子様イアクが騒々しく俺を呼ぶ声。・・・ つたぐ、今度はなんだ?「シテ味覚(命令)、俺には付き合えんぞ?

「あきらめつ……」れ見てよこれつ……」

これも毎度のことであるが、イアクは何やら大事のようこの何かを俺に見せる。まるで鼠を捕つてきた猫の如く。

「……んあ& amp; #12316;? なんだってんだよまったく……。」

イアクが差し出したものは、俺の予想に反して、意外な代物だった。

「……なんだ? 四名様、い招待……?」

「……つふつふつふ・・・・・びうびうつ! ? すゞいりでしょ & amp; #12316; ; ! ? 商店街の福引きで当たったのよ——つ! ?

それは、『南の島探険ツアー! =泊四日、四名様無料ご招待券!』なんていふアリガチなタイトルで括られた、チケットだった。

「ほほう……。」

「ねつ? ねつ? すゞいりでしょ? しかもこれ、一発で当てたんだよ! ? 誉めて誉めて——! ?

「……『南の島』なんて微妙なタイトルが気にはなったが、場所がなんであれタダで旅行が出来るなんて話は確かにオイシイ。俺は、珍しくまともなコースを持ってきたイアクを誉めてやることにする。」

「ふむ。……でかしたイアクつーお前はやっぱ出来る子だと信じていたぞつ! ?」

「えつへへー」

言いながら頭を撫でてやるとお子様は「満悦の表情。・・・びりで
もいいが、最近ますます猫化してきてるぞお前。

「それはそうと、これ四名様って書いてあるが、俺とお前、唐木さ
んと・・・あと一人はどうするんだ?」

「うーん・・・別に三人でもいいんじゃないの?他に連れてくつう
なの、居る?」

・・・いやまあ、居ないことも無いんだが・・・。

「唐木さんは行くだろ?誰か、他にいない?友達とか。」

そういうや、唐木さんに俺以外の友人が居るって話、聞いたことない
な。・・・まあ、あれだしなあ・・・。クラスでも多分あの様子に
違ひない。

「・・・連れて行つていいなら・・・居ないことも、無い。」

「マジですか?」

その瞬間、俺の興味は旅の内容よりも、唐木さんの友達のほうに引
かれた。この黙殺娘とともに会話出来る人間が他に居たとは・・・
多分、俺はそいつと気が合うに違いない。・・・いや、待てよ?も
しかしたら唐木さんにそつくりで、一人してひたすら読書ばかりし
てるような間柄なのかもしけん。そこに会話は不要だよな・・・。

などと勝手な想像を色々としているうちに、唐木さんはイアクに引

つ張られて買い物に出かけたり、俺は俺で先に夏休みの課題を仕上げちまおうなどと考えて机に向かつたりしているうちに何日か経ち、あつといつ間に旅行の当口がやつてきた。

2

「 とまあそういうわけで空港にやつてきたわけだが 」

俺は隣でなにやら「ソゴソ」と嬉しそうに荷物を漁るイアクに

「 なんだその大掛けな荷物はつー? 」

「 え? 」

イアクが手にしていたのは大きなボストンバッグに、これまたデカイ、リュックサック。更に手には紙袋が一つ。

「 たかが三泊四日の旅行に何故そんなに荷物が必要なのかつー? 」

「 だつて南の島よつー? 何があるかわかんないじゃんー! 」

何かつたつて・・・大体、『裁定者』のイアクに必要な何かつて、ナンだ? 着替えはともかくとして まさかつー?

「 ・・・お前、もしかして中に・・・お菓子やらなにやら詰め込んでんじやないだろうな? 」

「 そうよ? だつて、もし遭難でもしたらじしまりへ食べられなくなつちやうじやない? 」

・・・ああ、頭痛い。

呆れたが、言うだけ無駄なのは必要以上に解っている。・・・とりあえず見なかつたことにしておいた。

「・・・それにしても、唐木さん遅いな・・・。」

例の友人とは、駅で待ち合わせをしてくるらしい。俺たちは先にバスで空港まで来た。俺たちが着いてからもう三十分ほど過ぐる。やるそり来てもいい頃なのだが・・・。

「・・・『めん、遅くなつた。』

現れたのは、唐木さん。そしてその後ろには

「『』、『めんなさい！私の支度が手間取つたりやいまして遅れちゃつたんです！その、あの、『めんなさい！』

何やひ、ペコペコと頭を下げるポニーテールの少女が。・・・どうやら、想像と違ひ結構まともな子らしい。

「あ&a m o:#12316、そんなに待つたわけじゃないし、第一無理に誘つたのは『ちなんだしさ。気にしないで？ね？』

「い、いえつーこちらこそ、このような場にお誘い頂いて誠に恐悦至極というか、あの、えと、あ、ありがとうございました！――

・・・前言撤回。何やらやはり、テンパリ加減に若干不安が残る。・・・まあ悪い子じやなさうだけじや。

「あはは・・・俺は向井明。こっちはイアク

とまで紹介して、一瞬考えた。・・・どう見てもこいつは日本人じゃないよな。深く突っ込まれたらどうしよう。

「は、はいっ！ イア クさん、福引きでチケットを当たんですね？」
「この度はお招き頂きありがとうございます！」

要らぬ心配だったようだ。彼女は、何の疑心もなくイアクに頭を下げる挨拶している。・・・もしかして、この世でこんな細かいことを気にするのは俺だけなのかもしれんと、本気で疑うようになってきた。

「 私、藤堂遙つて言います。よろしくお願ひしますね！」

とまあそんなわけで俺たちの乗る飛行機が到着して、出発で
きたわけである。・・・途中、イアクの荷物が全部乗らなかつたり、
藤堂さんの荷物が何故かチェックで止められたりと、まあ多少のハ
ブニングはあつたが。・・・なんとか無事に出発できただけでもよ
しとしょつ。

3

白い雲。照りつける太陽。そして、テレビでしか見たことのなかつたような原色のハイテンションな植物たち。航空機に乗つて、たつた一時間足らず。俺たちは、南の島、『三重山島』に到着していた。

「うみのまつり」

イアクは到着後、荷物をバンガローに置くと、さっさと水着に着替えて飛び出して行ったようだ。・・・まあ、今ばかりはイアクがハイテンションになる気持ちもわからいでもない。南国的な雰囲気は、こうなんというか、それだけで妙にテンションを引き上げてくれる。商店街の福引きらしく、宿泊施設は簡素なバンガローだったが、まあその辺りは大して気にもならん。これで逆に豪華なホテルだったりした暁には、何か裏がありそうで余計恐い。

・・・あー、しかし、なんだ。なんでこいつことになるのか。

「ええっ！？ 部屋、一つなんですかっ！？？」

・・・そう、俺たちが泊まる為の宿泊施設には、部屋が一つ。・・・いわゆる、家族部屋といつやつなのだ。・・・まあ、四名様という人数設定で、それが「一般家庭」をターゲットとしたツアードと気付くべきではあつたのだが・・・。

「あー、心配しなくていいよ、藤堂さん。俺、ちょっと一人部屋が空いてないか管理の人聞いてくる。多分俺一人くらいならなんとかなるだろ。」

多少、懐に痛いが仕方ない。まあバンガローを借りるくらいの金額ならどうともなる。

イアクと唐木さんだけならともかく、藤堂さんも一緒となると四人部屋に男である俺が泊まるわけにもいくまい。そこらへん、藤堂さんに関しては常識が通用するみたいだ。・・・よかつた、一応今のところ俺は一般常識を間違えてはいなかつたらしい。・・・正直、最近は自信がなかつたからな・・・。

そんなことを考えつつ、管理室へと赴いたのだが・・・。

「……満室、ですか……」

結局、部屋は空こにならへべ、ビルのまゝもなくて帰つてきたのである。

「あ、でも俺泊まるといは見つけたから。ほら、あれで食堂あるだろ？あの店、夏の間は夜中も開けてるからんだ。だから俺、夜はあそこに泊まるよ。事情を話したらやうのおばさんも快く承諾してくれたし。」

これは事実だ。なんなら夏の間ずっと西口と西側止められたままである。・・・わすがにそれは一重にお断わりしたが。

「 つや、そんないけませんですっ！ や、えと、私はその向井さんをえよしければ、」

「 え？いや、だつてわすがに女の子ばかりの部屋に俺が泊まるわけには。」

「 ダメなんですっ！ 私のせいで向井さんご不自由な思いをさせないといけないなんて、そんな、せつか誘つて頂いたのに私、申し訳なさ過ぎて つー」

・・・ああ、確かにそうか。俺としては氣を使つたつもりなんだが・・・確かにそれでは藤堂さんが氣に病むことになつてしまへ。ビルやうの子は必要以上に氣負う性格らしい・・・。

「 ……分かつた。じゃあ遠慮なく俺も泊まるけど・・・ほとりいやだつたらちやんと言つてくれな？さつきも言つたけど、あの食堂のおばさん、かなり良いい人でさ、喜んで了承してくれたんだから。

「 は、はいっ！…ふ、ふつつかものですが、どうぞよろしくおねがしまつ つぐー？」

・・・おいおい。

色々と突っ込むことは山積みだが、俺たちはせつかくの南の島を、とつあえず心行くまで堪能することにした。

まずは海。さすが、南の島。空の青を映して透き通った海水はどこまでも、純粹に綺麗だった。

元気にはしゃぎ回るイアクと、普段よりも機敏な動きの唐木さん。落ち着きはないが、三人の中で見かけは一番大人っぽい藤堂さん。・・よくよく考えてみると、外見的には三人とも甲乙付けがたいほどの美少女だ。

・・・俺はもしさ、ものすごーシチュエーションを満喫しているのではなかろうか？・・・杉山、すまん！しばらぐ、三人がはしゃぎ回る姿にほげーっと見とれてしまっていた俺だった。

結局その日は、陽が沈むまでビーチで遊んでいた。

背中が陽に焼けて熱い。夜になると、気温は高いが湿度が低い分、割りと涼しく感じた。

「ねーねー、明日はいよいよ秘境探険だよね？ 秘境ってどんななんかな？ やっぱり動く石像とか謎のピラミッド遺跡とかあんのかな？」

？

例の食堂で夕食を摂りつつ、イアクが期待に満ちた眼で聞いてくる。

お前が一番未知の生物だろ！

・・・とシックリたい気持ちをぐっと堪えて、曖昧に返事をする。

「・・・さあな。 それより、それって確か、ボートで近くの島まで行くんだろ？ シアーッてのに添乗員も居ないし、俺たち以外のシアー客も居ない。 つてことはボートは貸し切りなんだよな？」

イアクはパンフレットをまじまじと見つめ、

「 そうみたい。 近くの港からボートに乗れるって。 あ、
でも。」

とまでも言つと次は藤堂さんが

「 現地集合つて、どうこいつなんでしょうっ！」

現地集合？・・・現地つて もしかしてつ！？

「ちよいパンフ貸せイアクつ！…」

イアクからパンフレットを引つたへると、よくよく囁を通す。

「…………『島への交通手段は各自用意してくださ』』 いいつ！…?
?…」

なんだそれ！？ツアープログラムじゃなかつたのかよ！？

「・・・島までは自分たちでじ皿田い。」

唐木さん・・・あんたもしかして始めつから氣付いてた？

「あ、そつか。だつたら別に行かなくててもいいつてことだよ
な。」

『えへへへつ！…』

俺の指摘に、イアクと・・・何故か藤堂さんまで不満の声をあげる。

「なんでなんでなんでへつ！…行ひつよおへ～！…あたしこれ楽
しみにしてたのよ～～つ！…」

「そつ、そつですよ！…秘境ですよ秘境！？謎に満ちた島・・・大
自然の神秘・・・これだけは絶つ対に行くべきだと思ひますつ！…」

いや、まあイアクは諦めるが・・・藤堂さん、あんたまで？しかも、そこまで言い切る？

「いや、だつてこれ、ボートに港から乗れるとは書いてあるけど詳しい記載が一切ないんだぜ？」この調子だと、ボートを出してくれる人まで探せつてことかもしれんぞ？大体、そんな秘境がほんとにあるなら観光客なんかが簡単に近寄れるわけがないだろ。」

そう、これがそんな大層な島なんだつたら、多分船の便などまず出ていないような無人島なのだろう。でなければ、別料金と書かずに『交通手段は各自用意』なんて記載するわけがない。・・・まあ仮に別料金だとしても、ツアーライトルに練り込んでるのに別料金な時点ではアレな匂いがブンブンするんだが。

「 やめときなつ！」

その時、声を荒げて割り込んできたのは、食堂のおばちゃんだった。

「あの島は、悪いこと言わないからやめときな。多分あんたたちが言つてるのは『赤煙島』だ。あそこは、昔から化け物が住み着いてるって言われててね・・・まあ、そんなもんは居やしないとは思うけど、あの近くは潮が渦を巻いてたり、流れが早かつたりで土地の漁師だって滅多に近づかないんだ。毎年、命知らずの馬鹿がある辺りまで船を出して、渦に飲まれたんだかなんだか知らないが必ず行方不明になるんだよ。死体どころか船の残骸すら見つかりやしない。」

・・・化け物の住み着く島？

この時俺は、おばちゃんの言葉が妙に気に掛かつた。少し前までの

俺なら、こんな話は氣にも止めなかつただろ。化け物など居るわけがない。・・・そう信じて疑わなかつた頃の俺だったら。

「・・・・」

「・・・・」

イアクと藤堂さんは、さすがにおばちゃんの本氣の忠告に黙つてしまつた。・・・イアクは、何かを考えているような顔をしている。

「・・・・ど、いきなり」めんよ。代わりと言つちやなんだが、あたしの知り合いに腕のいい漁師が居てね。明日はみんなで釣りなんてどうだい?なんだつたら」

厳しい表情を和らげて、おばちゃんが出した提案に藤堂さんは食い付いたようだ。

・・・しかし、何かが氣に掛かる。無人島。誰も近づかない島。化け物の噂。行方不明者。

死体が見つからないってのも氣になる。船ごと沈めばそりや死体も上がらないだろうが、残骸すら見つからないってのは行き過ぎだ。いくら渦に呑まれたにしても人間の体が有機体である以上、死ねば大概はガスを発生させるため一度はどこかに浮かび上がるだろうし、浮かび上がる場所がどこだか分からぬにしても捜索すれば船の残骸くらいは見つかるはずなのだが・・・。つまりは、船ごと丸々消えちまつたつてことになる。・・・そんなのは不自然だ。俺は後でおばちゃんに詳しく聞いてみることにした。

「　つてことでいいかい?」

「　はいっ!あ・・・でも、いいんですか?その漁師さん、ほ

んとに全部無料なんて　　」

「あつはつはー！　若いモンが、そんなこと気にするもんじゃないよ！　・・・　なんて言いたいとこだけじね、最近はここいらもめつきつ觀光客が減つちまつてさ。どうせ漁つたつて自分らの食べる分を細々と取つてくるぐらいだ。ついでにあんたら四人くらいがついてつたつて氣にもならんだろ？　それどころか、多分若い子たちを田の前にしていつも以上にはりきるんじゃないかな、あのじいさんは」

「

「漁師さんつて、おじこさんなんですか？」

「ああ、源吾郎じいさんつってね。まあここのらじや結構名の通つたベテラン漁師だよ。変わりモンで口は少々悪いが、腕は確かだし氣はいい。酒を呑むと少々愚痴っぽくなるがね。あつはつは！」

「　　聞こえてるぞー！」

藤堂さんとおばちゃんの会話に乱入してきたのは、白髪頭に口髭をたくわえた、色黒の逞しい老人だつた。

「　　あら、聞こえてたのかい？　よかつたじゃないか、まだ耳はもうつくしねないようだ。」

「　　フン、お前さんのデカイ声なら二十海里先でも聞こえるだろ？　よしー！」

「あつはつはー！　そりだらうねー　　」のじこさんが源吾郎じいさんだよ。　な？　変わリモンだろ？　」

おばけちゃんは、隠す様子もなくあっけらかんとそう言い放つ。・・・
おばけちゃんも十分変わり者じゃないかと思つたが、なるほど、どちらも悪いヒトには見えない。

「釣りの件ならワシはかまわんぞい。まあ、その口煩いオバハンに無理矢理押し付けられたのは見てたが。それでもいいのなら明朝六時に、港に来りやいい。今はちょうど沖にイワシの群れが回ってきておつての。追ってきたカツオやらシイラやらが腐るほど釣れるぞ。巧くすりやカジキなんかも掛かるかものー。」

「マジで? カジキって言えば、テレビなんかで見る体長が1mにもなる口のとんがつた魚だ。 つん、確かに楽しそうだ。

藤堂さんはすでに乗り気だし、唐木さんは・・・まあ多分行くだろう。イアクが静かだったのが気に掛かったが、とにかく俺たちはその話をありがたく受け取ることにした。

「さあ、そつと決まつたらあんたらは早く宿に戻つて寝な。明日は六時だろ? 夜更かしすると船酔いするよー。」

「あ、じゃあお勘定を

と、財布を出しあとした俺におばけちゃんは

「馬鹿言つとじやなことよ、金なんか取れるもんかい! どうしてもつてんなら明日はたっくさん釣つてきておくれ。その魚と引き替えつてことにしようじやないか。もちろん明日の晩飯もその魚次第だからね。気合いで釣つてくるんだよ?」

・・・おばけちゃんは勘定を受け取る気はないらしい。一瞬は躊躇つ

たが、ここまで言つてくれてるんだ、逆にお金を払うのが失礼に思えて、俺は一言だけ、

「 じゃあ、お言葉に甘えて。『ちやうさまでした、すみじへ
美味かつたです!』

とだけ言つと、おばちゃんは上機嫌で笑つて、明日も来いと言つて見送つてくれた。

7

「 いい人たちですねえ。」

帰り道、藤堂さんが嬉しそうに言つた。

「 ・・・ああ、うん。ちつとばかり強引な人だけどね。」

なんというか、確かに結構強引なおばちゃんだが、凄く暖かい人だ。漁師のじいさんも、とても気さくな人に見えた。

この町に住む人たちはみんなあんな感じなのだろうか。だとしたら・
・・まだまだ日本も捨てたもんじゃないな、なんて考えつつ、都会じゃ絶対にお目に掛かれない満天の夜空を見上げながら、俺たちは宿への帰路を辿つた。

バンガローに着くと、時刻はまだ八時過ぎだった。

唐木さんと藤堂さんは近くに露天風呂を見つけたとかで、着替えを用意して出でていった。俺も誘われたが、唐木さんが一言、混浴だよと口にして、藤堂さんがなにやらまたテンパり出したのでとりあえず

ず謹んで辞退した。イアクは少し外で涼んでくると部屋を出たので、俺は一人で取り残されたわけだ。

・・・そういうば、食堂での話を聞いてから、イアクがあまり元気じやないな。露天風呂なんて話、いつものイアクだつたら一番に飛び付くはずなのに。

俺は、とりあえずイアクの後を追つて外に出ることにした。

8

「おひ、いたいた。」

バンガローのある集落から道を挟んで脇に出ると、公園のような場所があり、ベンチにイアクが座っていた。

「・・・・どしたの？ 明。」

わつきはそこまで氣付かなかつたが、どつきやうりイアクにいつもの霸気がない。

「どつしたはいつひの台詞だ。・・・・元氣がないぞ？なんかあつたのか？」

いつもなら憎まれ口の一つでも吐いてくるイアクだが、今は妙におとなしい。・・・もしかして、あの『赤煙島』の話からか？化け物が出るつてまさか？

「・・・ねえ、明は、楽しい？」

・・・断片の欠片のこと確かめようと思つたら、何やら神妙な面持ちでイアクが訊ねてきた。肩透かしを食らつて、一瞬躊躇つたが、

俺は答えた。

「……楽しげぞ? ビリした? お前は樂しくないのか?」

と、返した俺を見て、やはりイアクは真面目な顔で、答える。

「すへ　　つゝくへ樂しげよ。幾分、あたしがこの世界に創られてから今まで　　この一ヵ月くらいの時間が、一番樂しげくらい。うつと、そう。恐いくらいに樂しげの。」

ならよかつたじやないか、と言おうとして、気付いた。イアクの顔が、楽しいなんて口にしながら、とても淋しそうに笑顔を作っていることに。

「……あたしはね。ずーっと、うん、それはもう氣の遠くなるくらいの間、人間たちを見てきた。それはそう、例えるなら物凄く長い映画を、特等席で独り、ずっと観てるような感じかな。でもどんなに面白い映画でも、一日中観てたら飽きるよね?」

・・・まあそりゃそうだ。エンターテイングまでの話が長すぎて、ビリで感動していくやら分からなくなるだらう。

「……でも、席を外すことは許されないの。特等席に座ることを許された選ばれた者なんだからーつて。・・・そのうちにね、気付くの。ああ、あたしは映画を特等席で観る権利は与えられてても、あの画面の中で女優の一人になることは絶対に出来ないんだ、って。だって、映画は観客が居て初めて映画になるんだもの。観る人が居ない映画なんて、意味がないじやない? それで解ったの。映画を作った人は、あたしに觀せるために作ったんだなって。だからあたしをこの終わらない映画館に招待したんだなって。」

そこまで聞いて、イアクが何を言いたいか理解できた。いや、正しくは理解できたわけじゃない。だって俺はイアクの言つ『映画の出演者』だ。アクターは観客を選んで演じてるんじゃない。台本の意図通りに演じてるだけなんだから。

「…………」一つストーリーが終われば、また違うストーリーが用意されてるの。でも上映が終わった作品の出演者は、あたしが観てたつてことすら知らない。だって演じきつたらそれで彼らの役目は終わりだもの。彼らが観客側に来ることは、絶対にないの。」

「イアク……。」

名を口にして、はつとした。……俺はイアクに向ひてやれる？…どう言えばいい？

「……あは、でもあたしはね、やつぱりその映画が好きなの。そんでもつて、映画の出演者も、全部好きなんだ。……だから、途中で投げ出さないで今まで観れてこれた。……だけど……。」

イアクは突然、表情を変えた。今にも泣きださんばかりの、悲しきうな顔。

「…………」でも、あたしは今の、念願叶つてやつと出演者の一人に抜擢されたあたしの毎日を捨てたくないって思つてるーこの楽しい毎日を、失いたくない！…・・・だけど、ダメなの。このストーリーが終われば、何も無くなるか、また観客に逆戻りか。…・・・ねえ、あたしはどうしたらいい？…どうしたらいいの・・・？」

・・・俺は、思わず口籠もる。世界を救えば、平和な毎日が戻つて

くる。少なくとも俺たちにとつては。

だが、イアクはまた「元の・・・いや、仮に俺たちがその後も一緒に過ごせたとしても、『裁定者』であるイアクは、俺たちが寿命で死んだ後でもこのまま生き続けるんだ。

それは死ねない故の、永遠の螺旋。多分、これまでずっとイアクはそんな永久に近い時間を過ごしてきただんだろう。

だけど・・・。

「・・・イアク。よく聞け?・・・神様・・・『クウルトゥル』は何の為に俺たちを、この世界を創つたと思つ?」

イアクは涙を溜めた眼を一瞬ぱちくぱちくさせると、口を開いた。

「・・・何の為?・・・そんなの、気紛れに決まつて」

「多分違う。ああ、これは俺の推測でしかないんだが

きつぱりと否定した俺を、また大きな瞳をぱちくぱちくさせたが、イアクは不思議そうに俺を見つめていた。

「『クウルトゥル』は、時が経つことに無氣力・無感情になつてゆく自分を嘆いていた。まあそりやそうだ。『旧き盟約』とやらで他人との接触を拒んでいたんだからな。『個は個にして成らば』。要するに、寂しかつたんだよ。多分な。独りは寂しいんだ。誰だつて。それに気付いたんだな、『クウルトゥル』は。

だからこの世界を創つた。誰かに慰めてほしくて。だからこそ、『記憶』を集めようとしたんだろ。独りじゃない『記憶』。それこそが力。なんだつて出来る『力』こそが『記憶』つて、そういうことだろ?」

イアクは瞳を大きく開いたまま、俺をぽかんと見つめていた。

「だからな？多分、この世界で、『記憶』つまり、『願う』って力は多分何よりも強いと思うぞ？『クウルトゥル』は、それが知りたかったんだ。だから、『願う力』を集める為に、自分とはまったく逆の、有限である『生物』なんてもんを創ったんだろうな。それを知りたいが為に。」

イアクは相変わらず俺の目を見据えたまま動かない。ハトが豆鉄砲を食らつたような顔をしている。

「無限の中での願いはなんだ？無いもの求めるなら有限だろ？」

「じゃあ、俺たち人間は有限である以上 無限を求める。だけど、有限である故にそれは叶うことがない。だから、『願う』ことしか出来ないんだ。強く強く 果たされないことである」とほど、強く『願う』。 「だから、お前が無限だというなら」

一呼吸置いて、俺は、告げた。

「 強く願えば、必ず叶う。お前の望むよくな。」

最後に告げた後、なんだか、俺は急に恥ずかしくなつて顔を背けた。イアクは何も言わない。・・・まだ、泣いてるのか？

「 ふつ」

・・・ん？なんだ？今のは？

「...」

？ · · · おい。なんか、いつぞやの記憶が蘇るぞ。『ジヤヴか』これは

「お問い合わせ」

くそう。またあんときの再現か？・・・しかし、よく笑うヤツだな
まつたく・・・。

ふははははは
おなつ、おなかよじつ
つひーつ
ははははーーー

あーもうこいや、いくらでも笑いやがれ」んちくショーナー！

「 クウルトルが、寂しがり屋？あはつ、あは、そんなこと言つたの、あ、あんたが初めてよ、ふふつ、はは、あ 。」

「・・・なんともいいやがれつ。」

俺は背中を向ける。・・・多分恥ずかしさで、俺の顔は真っ赤なんだろうな。　　と、その時、背中に、イアクがもたれてきた。

「ありがとう。」

・・・
一言だけ、消えそうに小さな声でそう呟いた。が、次の瞬間

「 つじえつー？」

思いいつきつ背中を叩きやがった！？

「 あははっー先に部屋に戻ってるわよーーそろそろトーコたちが帰つてくるだらーしーーー！」

「お めいっ！」

そのまま、俺を置いてイアクはバンガローのほうに駆けていった。俺は、ため息を一つついて、肩を下ろす。ま、どうにか元気が出たみたいだ。別に 何がどうってわけじゃないが、あいつが落ち込んでいるところちまで気が滅入る。

俺は、公園から見える海のほうを見た。今日は満月。夜の水面に月が映つて、揺れる。

・・・こんなに平和そうに見えて、最後の時間は確實に迫っている。

俺にしか出来ないといづなり やつてやる。世界を救うなんて大それたことは分からぬが、この平和を守る為には、やるしかないんだ。

海に向かつて祈る。

願わくば この平和な世界が、永遠に続きますよしこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8321c/>

クルトゥース～碧槍の帝～

2010年10月9日07時35分発行